

『タクシー・ドライバー』とその時代

田 中 紀 子

要 旨

Robert De Niroの主演、Martin Scorseseの演出により出来あがった映画『タクシー・ドライバー』(*Taxi Driver*)は1976年に公開された。兵士としてベトナム戦争に赴き、アメリカへ戻ってニューヨークでタクシー運転手の職に就くTravis Bickleを主人公とする作品で、孤独な彼の目を通して当時の都会にはびこるセックス、麻薬、暴力など様々な問題が描き出されている。実際には、Paul Schraderの脚本のセリフや場面設定、色の使用において幾つもの手直しが施されたのであるが、その結果さらにインパクトの強い仕上がりとなり、アメリカ1970年代半ばを代表する作品と称することのできる作品となっている。

キーワード：『タクシー・ドライバー』 Paul Schrader Martin Scorsese Robert De Niro Travis Bickle 1970年代 孤独 セックス 麻薬 ベトナム戦争 海兵隊

はじめに

映画『タクシー・ドライバー』(*Taxi Driver*)がアメリカ国内で封切られたのは1976年2月8日。監督Martin Scorseseや脚本家Paul Schrader等が不安を抱きながら迎えた初日であったが、最初の回の開始時刻前にはすでに次の回のチケットを求める長蛇の列ができていて、館内ではタイトルがスクリーンに浮かび上がると拍手が沸き起こるほどの好調な滑り出しであった。同年5月の第29回カンヌ国際映画祭では最高のパルム・ドール賞受賞という快挙を成し遂げた。最近では、アメリカ映画協会が選ぶ「アメリカ映画ベスト100」において1998年に47位、2007年に52位、同協会が2001年に選んだ「スリルを感じる映画ベスト100」では22位を占めている。さらに2003年の「悪役ベスト100」

では主人公Travis Bickleが30位である²。これまでアメリカ国内で大衆の目を楽しませてきた映画のおびただしい数からすると、この順位はかなり高い評価である。監督の中では特にQuentin Tarantinoのお気に入りの作品であり、1994年の*The Charlie Rose Show*というアメリカのテレビ・トーク番組中で、好きな3本の映画に入ると話している³。また彼は、2002年版イギリスの映画雑誌*Sight & Sound*の投票においてベスト映画12本の中にこの作品を挙げているほどである(芝山226)。

この『タクシー・ドライバー』の主題は、Schraderの脚本の冒頭に引用された一映画のスクリーン上で見ることはできないが—Thomas Wolfeの自伝的なエッセー「神の孤独な人間」(“God’s Lonely Man”)中の以下の一文に明示されている。

孤独とは、稀有で奇異な現象であるどころか、人間という存在の中心を成す不可避の事実であり、このことを私は自らの生涯を通して確信している⁴。

Scorseseがこの脚本に惚れ込んだことが映画制作の発端となったのだが、撮影の過程においては監督と脚本家、そして俳優達との話し合いを経て、何か所もの修正や削除、アドリブの追加等が行なわれ、完成にこぎつけている。中でも暗殺を決行しようとするTravisを演じたRobert De Niroを観客の網膜に強く焼きつけたのが、その髪型である。脚本では単に「短く刈り込んだ髪」とされているが、映画ではモヒカン刈りになっている、人物の異様さがより強烈に打ち出されている。本稿においては、そういった脚本と映画相違点を取り上げながら、いかに「孤独」という主題を映画が印象づけているか、また1970年代半ば当時のアメリカ社会と国民の心情をも考察してゆきたい。

I オレンジと白

Schraderの元の案では「歩道の縁には雪が積もり、風が唸り声を上げる」冬のマンハッタン、タクシー会社の車庫へ黄色の車が入り出す様子をカメラが映した後、主人公Travisがその人事課の事務所へと入って行くという始まり方であり、短時間の雇用面接が終了したところでクレジットタイトルが流れることになっている。しかし実際の映画では、けたたましく不気味にドラムが響く、と同時に夜の闇に立ちこめる排気ガスや蒸気がオレンジ色に照らし出され、その中からヘッドライトを点けたタクシーが1台ぬっと現れるというスタートである。間もなくサクスが奏でるけだるくやるせないメロディーへと移るのだが、これは『サイコ』(*Psycho*, 1960年)や『鳥』(*The Birds*, 1963年)などAlfred Hitchcock映画で手腕を発揮したBernard Herrmannによる曲である。そしてスクリーン上には左右に動くTravis役のDe Niroの両目、フロントガラスに落ちる雨の滴越しにはぼやけて見える色とりどりのネオンサイン、通りを横断する人々をバックにクレジットタイトルがオレンジ色で示されてゆく。

一方エンディングについては、元の脚本によると、Travisがかつて心を惹かれた女性 Betsy を客として自宅まで乗せ、歩道に降りた彼女の見送るタクシーが道路を走り去り消えてゆくことになっている。映画ではこれが変更され、Betsy が降車した後オープニングと同じニューヨークの夜の光景の中をTravis は車を走らせ、それが他の多くの車に紛れてゆく。すなわち、オープニングとエンディングに挟まれた物語はTravis の回想であったことがわかるという仕組みである。この後、オープニングの際と同じオレンジ色の文字のエンド・クレジットが現れる。

オレンジ色については、Fontana のように「豊穡、希望、新たな始まり、霊性の兆し」(144) と肯定的な捉え方のみをする者もいるが、『イメージ・シンボル事典』には熱や火との関連から野心、誇り、活力、健康などを意味するとの記述に加え、悪意、凶暴性、絶望などを表す色でもあるとの解釈が載っている (472)。また「攪乱と苦悩と混乱」(岩井 108) をもイメージさせるとの解説もある。『タクシー・ドライバー』の最初と最後に使われているこのような両義性を孕むオレンジ色は、主人公 Travis の状況を適切に表す色だと言えよう。1965年にアメリカ海兵隊がダナンに上陸して以降、激しさを増す一方の戦争に対し、アメリカ全土では特に若者達の間でベトナム戦争への反対運動が活発になっていた。長期化、泥沼化したこの東南アジアでの戦争がアメリカにとっては恥辱的な敗戦としてようやく幕を下ろしたのは1975年であったが、Travis が名誉除隊となったのは1973年(脚本では1971年)とされている。つまり彼は、相変わず続々と兵士が派遣されてゆく、先の見えないアメリカに帰国したわけである。アジアを共産主義から守るという政府と軍が掲げた大義名分を正義と信じ、理想に燃えて戦場に赴いた点では他の多くの兵士と違わなかったはずであるが、戻ってきたアメリカはもはや彼をヒーロー扱いしない。都会の路上にオレンジ色に立ち上る蒸気や排気ガスは、Travis には炎上する戦場の悲惨さを連想させるものであろう。彼の年齢は26歳、まだまだエネルギーが体内にたぎる年齢ではあるが、アメリカには戦場に替わる活躍の場もなく、人生の目的もなく、孤独と虚無感に取りつかれている。若いエネルギーと、それを発揮する場が定まらない焦燥感、単調な日常における不健全で不完全なエネルギーの燃焼を表すのはオレンジ色以外ないのではないだろうか。

同時代の若者を扱った映画の中で、やはりオレンジ色が効果的に使用されている作品をさらに2本紹介しておこう。一つは『地獄の黙示録』(Apocalypse Now, 1979年)の冒頭シーンである。1,000℃を優に超す高い破壊力を有するナバーム弾により、カンボジアの緑豊かな森林が一瞬のうちにオレンジ色の炎に包まれ、1967年にヒットした曲“The End”の「これで終わりだ、麗しき友よ」(“This is the end, Beautiful friend”)と流れ始める。しばらくすると、ここでもオレンジ色の中に男性の両目が映し出される。サイゴンのホテルに一人横たわるアメリカ軍大尉Willardの目で、彼がこの先目の当た

りにする狂気や破壊的行動といった不吉な展開を予感させる。もう1作は、この“The End”の作詞とボーカルを担当したJim Morrisonと、彼の率いるロックバンドを取り上げた『ドアーズ』(The Doors, 1991年)である。終盤で、麻薬により引き起こされたJimの幻覚に登場するのがオレンジ色の砂漠と岩山で、彼が一人で入って行く洞窟には豹、蛇、幼少の頃に死体を見かけた原住民の老人が姿を現し、死に魅入られた人間の危うさが描き出されている。こうなるとTravis、Willard、Jimの孤独や魂の渇きは個人レベルを超えたものであり、1960年代後半から1970年代にかけてのアメリカ社会を覆うものとして捉えられ、自信を喪失しながらも殺戮を重ね、夢と理想のつなぎ場所を見出せないアメリカの人々をオレンジ色が見事に象徴していると言えよう。

これとは逆に、白ほど当時のアメリカの状況にそぐわない色はないであろう。白は通常、純潔、霊性、真理、高貴などと結びつく色であり、『タクシー・ドライバー』では、人々の汚れた欲望と犯罪に不満をかこつTravisの目がある日釘付けになる一人の女性に用いられている。彼女は次期大統領候補者の選挙本部事務所に勤めるBetsyで、彼女の最初の登場のシーンは、脚本では「黄色いドレスを着て、デスクで電話に話していた」(16)となっているのだが、映画では、真っ白なドレスに身を包んだBetsyがTravisのタクシーの横を歩いて事務所に入って行く場面に変更されている。Travisにとっては「まるで天使のように見えた」(17)ほどの衝撃である。それまで暗く薄汚れたニューヨークの通りや人々を見せつけられていた観客にも、純白のドレスはハッと息を呑むほどの衝撃を与える。また、机に向かって座り上半身のみ見せるより、昼の街中を清涼な風を彷彿とさせて歩く全身のショットにし、さらに黒いベルトを組み合わせることで白がより強調され、知性の鋭さも加わっている。夜の低俗な人間達とは対極的なイメージを打ち出すという工夫が凝らされているのである。その上スローモーション撮影を取り入れることで、Travisには時間が流れるスピードさえも変わってしまったかのような衝撃であることが示されている。

Travisは「この不潔なゴミ溜めの中、彼女はたった一人だ。誰も彼女に触れることはできない」と日記に書きとめる。彼女が純粋な精神を持つ孤高の人だというのはTravisの勝手な思い込みにも他ならないのだが、彼女をほぼ神格化してしまったのには白という色があったからこそであろう。「ゴミ溜め」のような現実の世界の浄化を強く願う孤独な彼の理想が、白をまとったBetsyだったのである。

Ⅱ 「病んだセックス」

4月のある日の昼どき、マンハッタンにある次期大統領候補者Charles Palantineの選

拳本部事務所で、運動員の男女一BetsyとTom一が話している。候補者を大衆にアピールするためには政策よりもまず人物のイメージが大事だということになり、Betsyが「ダイナミック、知的、明朗快活、魅惑的」という単語を並べると、すかさずTomが『『セクシー』を忘れてるよ』と口を挟む。政治家のルックス、性的な魅力までが重視されるという1960年のケネディ対ニクソンのテレビ討論以降の傾向を思わせるこの場面は軽い笑いを誘うが、映画の大半を覆うのはむしろセックスの陰湿さの方である。

Schraderの脚本では、Thomas Wolfeの孤独についての文章の引用の次にTravisの人物描写がなされている。それによると、Travisは「徹底した一匹狼」であり「ハンサムで真面目そうな目つき、無邪気な笑みを浮かべる」のだが、その裏には「恐怖、空虚感、寂しさ」を抱えており、「彼はセックスの臭いを漂わせている－病んだセックス、抑圧されたセックス、孤独なセックス。前へ前へと向かう、しかし目標は定かでない粗野な男性の力そのものだ」(1)と、性的な面が強調されている。

開放的に人と交わることを好まない「一匹狼」のTravisではあるが、仕事が引けるとアパートへ直行して一人きりの状態に浸ろうとはせず、朝食と気晴らしと時間潰しの場として習慣化してしまったポルノ映画館へと向かう。そして受付嬢に名前を繰り返し尋ねるのだが、性的な誘い、仕事の妨害であるとみなされ、支配人を呼ばれそうになる。

Travisは受付嬢との会話を断念せざるを得ず、一人きりでポップコーンやキャンディやコーラという不健康な朝食を摂りながら、スクリーンに映る男女の行為を見ることになる。だが彼を演じるDe Niroの表情は、過激なセックスシーンに目をぎらつかせ、性的な不満を解消させている男性のものではない。De Niroは両目にもこけた頬にも眉間の皺にも癒し様のない深い寂しさを滲み出させていて、Travisの苦悩がもっと深い精神的な飢餓であることを示している。人付き合いは苦手であっても、生きた人間の存在を感じられる場所、少しでも心と言葉を通わせる相手を求める気持ちが強いのであって、脚本家Schraderが表そうとした「セックスの臭い」を漂わせるTravisとは異なっているようだ。

このようなTravisの人格描写についての差異は他の場面、たとえば彼のアパートにも見ることができる。脚本では、彼のアパートは以下の様に描写されている。

薄汚れた古いマットレスが壁に寄せて置かれている。床には古新聞、くたびれた街路図とポルノ雑誌が散乱している。安っぽい作りだが一部10ドルはするポルノ雑誌には、黒い革紐や物干し綱で縛られ、さるぐつわをされた全裸の女性の白黒写真が掲載されている。ぐらぐらする椅子とテーブル以外には家具は無い。部屋の一つの隅には縦にしたメロンの木箱が置かれ、その上にぼろい小型のテレビが載っている。別の隅にある赤い絹布はヴェトナムの国旗のようだ。漆喰を塗った壁には判別できない言葉や記号、数字が落書きされている。以前電話機が取り付けられてあった壁

には黒い電線が垂れ下がっている。(8)

映画における彼の部屋も粗末なもので、壁もドアもひびが入り、壁の一部は剥がれていて、隣室の声が漏れ聞こえてくる。パイプベッドのマットレスの上には散らかった雑誌、テレビの上には飲み終えてへしゃげたコーラ缶や蓋が開けられたチョコレート菓子の箱など、雑然としている。しかし、何冊もの雑誌の表紙や開いたページに女性のヌード写真は無いし、壁に汚い言葉の落書きも無い。ガスレンジの上には鍋が置かれているが、食べ残した物が入ったままになっている様子ではない。Travisはテーブルに向かって几帳面に日記をつけているところで、「ありがたいことに雨が降ると、舗道からゴミや屑を洗い流してくれる」という清潔さを望む彼の独白が流れることもあってか、「病んだ臭い」を我々が嗅ぎとることはできない。

Betsyとの初デートの夜、Travisはボルノ映画館へ連れて行く。原作者であるSchraderは、この行動には「Betsyを汚したいという欲望⁵」が起因していると解説しているが、果たしてそこまで言えるだろうか。高い教養があり、服装も上品な彼女と行く場所としては、確かにあまりにも場違いであり、卑しい下心だと勘繰られても当然であろうが、気の利いた洒落た場所など縁のないTravisには、ふだんの自分の行きつけの所以外は思いつかなかっただけではないだろうか。黒川裕一も「全く悪意のない、普段通りの行動」(136)と解釈している。Betsyは「ファックしようって言ってるのと同じよ!」と激怒してさっさとタクシーに乗り込み、この場を去る。「話をしたいんだよ。話ぐらいできないか? 話し相手になってくれないか?」と畳みかけるTravisには悲壮感さえ漂う。彼はセックスを急いでいたのではないのであろう。

また脚本の後半では、不眠が続き食欲も排泄も不調となったTravisがマグナム銃を膝に置きテレビを見ている場面が描かれている。午後遅くのロックンロール番組が放映中で、激しく踊るティーンエイジャーの女の子たちの胸、腰、股の部分が容赦なく映し出されているのだが、その舐めまわすようなカメラの視線は「Travisの感覚そのもの」であり、彼は「なぜあんな(ディスクジョッキーの)馬鹿野郎が若くてきれいな女の子達にモテるんだ?」と思っている(57)との解説がなされている。映画では、テレビ画面に映っているのは10組ほどの男女のペアで、スローな音楽に合わせてダンスをしているが、女の子の体の部分が特にクローズアップされてはいない。Travisは耳のそばにピストルを構えて、画面を凝視している。瞬きもせず、表情はこわばったままで、性的な関心どころか人間自体に対する関心を全く感じていないようである。ボルノ映画館での場面より、さらに虚無感と孤独感を増した人間の姿がここにはある。

夜な夜なタクシーを走らせるTravisの目に映るのは、性欲に駆り立てられる人々、その欲望につけ入る「けだもの達」のうごめく様子であり、彼は次のようなつぶやきを発する。

どいつもこいつもけだものだ。けだもの達が夜になるとこぞって出てきやがる。娼婦、売春婦、ゲイ、オカマ、ホモ、ヤク中、みんなビョーキだ、金目当ての奴らばかりだ。

背中を大きく開けたドレスで街角に立って客を待つ売春婦達、彼女達を下品な言葉でからかう10歳そこそこの少年達や、明らかに未成年の2人の売春婦に声をかけられてそれに応じる若者達、そして「あんなアバズレ、殺してやる！」とわめく男性など、これでもかと言わんばかりに画面にはセックスに関連した光景が映る。

ポルノ映画館の場面では、受付の女性が読みかけていた雑誌がカウンターに開かれています、そのページに「…の性生活への影響」(“... AFFECTS YOUR SEX LIFE”)との見出しが躍っているのを我々は一瞬見ることができる。ポルノ映画館という場所柄でもあり、この女性には雑誌を伏せるなどの気遣いや恥じらいは不要かもしれないが、脚本には書かれていないこの部分を追加したことにより、倫理観、羞恥心の麻痺した都会が表されていると言えよう。

タクシー乗務も日数を重ねると、Travisは仕事が引けたあと運転手仲間の溜り場となっている安食堂へ立ち寄るようになる。彼は積極的に会話に参加するわけではないが、彼が耳にする仲間達の話には、乗客の女性とセックスをしたことや、ゲイカップルの乗客が喧嘩を始めたことなどが含まれている。

Travisの乗客としては、後部座席で黒人売春婦と性行為を始める白人中年男性、ポン引きから逃げようとして飛び乗ってくる十代の売春婦、黒人の愛人のもとへ家出した妻の居場所を突きとめ「44マグナムでぶっ殺してやる」とつぶやきながら車中から睨みつける白人男性などが登場するが、Travis自身はこういった乗客や他の運転手に影響されるのではなく、あくまでも醒めた目で彼らを眺め、精液や血液などで汚れた座席を淡々と拭き、翌日また業務に戻る。

つまり、「病んだセックス」に毒されているのは、Travisよりもむしろ1970年代半ばのニューヨークというアメリカの都会だと言えよう。

Ⅲ 麻薬

病める都会は暴力の面にも表れている。数人の少年達がTravisのタクシーを追いかけて缶や瓶を投げつけたり、路上では昼日中に老人同士が掴み合いの喧嘩をしていたり、甲高いパトカーのサイレンが鳴り響いたりする。また、ある運転手が何の理由も無く客に襲われ耳を削ぎ落されたという事件がTravisの耳に入ったりする。初めのうちは暴力を見聞きするという受け身の立場のTravisであったが、行動面に積極的な破壊性が急速に増してゆく。夜中たまたま入った食料雑貨店では強盗が店主に銃を突きつけるところ

に出くわし、Travisは携帯していた銃でその強盗を射殺して店主の命を救う。そして最終的には十代前半の少女に売春をさせるヒモSportと売春部屋の見張り兼集金係の殺害へと至ることになる。

こうした暴力的な出来事以外に、Travisの独り言でも“Junkies”と繰り返されるように、この映画には麻薬に関連する場面が多く見られる。中でもショッキングなのは、ピッツバーグから家出をしてきてSportに騙されて売春を続ける少女Irisの言動であろう。以前Travisのタクシーに飛び乗ってSportから逃げようとしたことをTravisが思い出させようとしても「覚えてないわ。きっとヤクでラリッてたのよ」と彼女は平然と言い、さっさとセックスを始めようとするのである。この他には麻薬の作用だと思われる歩道上に座り込んで動かない若い男、ビルの陰でふらついている中年の男、街角から警官に連行されてゆく男など。カメラは主要人物達の動きを追いながら、その画面の一部にこうした人々を瞬間的に、そして効果的に捉えている。

また映画には、脚本のセリフを変更してまで麻薬のはびこるニューヨークを印象づけようとしている箇所がある。TravisがAndyという銃の売人から4丁の銃を購入する場面においてである。もともとは、Andyがさらに野球、バスケットボール、ホッケー試合のチケットをも売りつけようとするのだが、映画では多種類の麻薬や覚醒剤を勧めることになっている。

Andy: マリファナ、ハシシュ、コーク、メスカリン、ダウナー、ネンブタール、トルエン、抱水クロラルはいらんか？興奮剤、アンフェタミンはどうだ？

Travis: いや興味ないね。

Andy: クリスタル・メスだって都合できるぜ。笑気ガスだって。どうだい？

一度も麻薬や売春に関わる事のないTravisは、さらに映画では煙草を1本も吸わない人物となっている。脚本によるとTravisはヘビースモーカーで、最初タクシー会社にやって来た時にも煙草を吸いながら話すという具合なのだが、クリーンな男性という設定にして他の人々の墮落、不健康さを目立たせたのは映画における成功であろう。

IV 「歩く矛盾」

1970年代には、ヴェトナム戦争への反感から政府や親の世代の価値観に反旗を翻し、フリーセックスと麻薬とロックミュージックのヒッピーの生活に飛び込む若者達が目立っていたが、Travisはその一員になろうとはしない。彼は両親への愛情を持ち続けていて、結婚記念日には忘れずにお祝いのカードを書くほどである。一方、ピッツバーグの自宅から飛び出し、両親には嫌われていると思い込んでいるIrisは、親とは異なる新しい風潮に憧れて悪ぶって見たがる典型的な思春期の娘で、年配者が眉をひそめる

Mick Jagger、Bob Dylan、Peter Fondaといったカウンター・カルチャーの担い手のポスターを部屋の壁に貼っている。また彼女は親が付けた名前を気に入っていない。Schraderが「古めかしい19世紀風の名前である」と解説するIris（アヤメの花）には「死」や「豊穡」の他に「無垢」という意味合いもある（アト・ド・フリース 358）。女性に清らかさを願うTravisにとっては好ましい名前の範疇に入るであろう。「いい名前じゃないか」との彼の言葉には、単なる表面的な慰め以上の思いが入っていると思われる。Travisに対して「ヴァーモント州のコミュニオンへ一緒に行って暮らそう」とIrisは言うが、彼は「雑誌で写真を見たことがあるが、あまりきれいでなかった」とその誘いには応じない。逆に「女の子は親元で暮らすべきだ」とか「若い娘はお洒落したり、学校へ行って、男の子と遊んだり、そんな風にすべきだよ」と言う。

つまり、Travisには女性に純粹さを求める極めて保守的な部分と、ポルノ映画を良心の呵責なく見るという世間的には不道德とされる部分が共存している。登場人物の一人であるBetsyは、彼と初めて話をした日にこの点にいち早く気づき、Kris Kristoffersonの当時流行っていた“The Pilgrim; Chapter 33”（1971年のアルバム*The Silver Tongued Devil and I*に収録）の歌詞の一節を引用して彼を「歩く矛盾」と称する⁷。現状に大きな不満を持ち、生き方に迷いを覚えながらも、伝統的な考え方を振りきってワイルドな生活に思いきって転向することのできない20代後半のアメリカ人も多くいたはずで、そういった人々のアイデンティティの揺らぎをTravisが体現していると言えるのではないだろうか。

Ⅳ ヴェトナム戦争と海兵隊

Travisは、タクシー会社の雇用面接において軍歴を尋ねられ「1973年5月名誉除隊」と答える。これにより彼が何か月も患っている不眠症は、ほぼ間違いなくヴェトナム戦争の後遺症だと推測できる。脚本では、銃の業者AndyがTravisのジャンパーの「ヴェトナム」という文字を見て「ナムにいたんだろ？あっちじゃ、たくさん武器を扱ったに違いないな」（54）と言い、Travisは「そうさ。あっちこっちの病院へ回されたんだ」と答えてすぐに「俺は絶対に戻らんぞ。行かせたかったら、まず俺を殺すんだな」と続けるのであり、いかにヴェトナムで不快な経験をしたかが伝わってくる。また、シークレットサービスの男に向かって、自分にもその仕事の適性があるとアピールする際に「俺は軍隊にいたこともあるんだ」（73）と言う場面もあるのだが、これらのセリフはすべて映画では使用されていない。彼の口から戦争について語られることは無く、画面上に回想としての戦場が映し出されることも無い⁸。最初の面接の際も、乗務中も、射撃練習そしてPalantineの選挙演説会場に向かう時も彼は軍隊のジャンパーを着用しているが、

アメリカにはArmy & Navyという店が数多くの都市にあり、一般市民でも容易に軍の用品を購入できるので、彼の服装から退役軍人だと決めつけることはできない。雇用面接での一言と、シャツを脱いだ時に見える彼の背中に残る大きな傷跡によってのみ、ヴェトナム戦争と彼の結びつきを知らせるという手法が取られている。

さらに、脚本の「陸軍」は映画では「海兵隊」に変更されている。この変更がTravisという人間の特徴付けとストーリーの展開をより効果的にしていることを確かめてゆこう。1883年以来の海兵隊のモットーは「常に忠実であれ」である。アメリカの軍隊の中で最も過酷なトレーニングが課せられることで有名な海兵隊において、新入隊員の訓練プログラムのブート・キャンプの入口には「海兵隊員になるには、自己、同士、隊、国家、そして神を信じ、変わらぬ忠誠を誓うこと」と書かれている（野中 156）。全身全霊でその大義を守るべく努めることが徹底的に叩きこまれるのであり、「一旦海兵隊員となったなら、一生を通じて海兵隊員」（同 161）とみなされるのである。彼らの強靭さと誇りをよく表しているのが「海兵隊讃歌」であろう。その中には以下の様なフレーズを見出せる。

…真っ先に戦う 正義と自由のために
誇り高きその名は 合衆国海兵隊
…誇りをもって任務にあたる我々海兵隊に祝福あれ
数多き戦いにあつて命を賭け、くじけたことのない我等
陸海軍が天国を夢見ようとも
地上の街頭を守るは合衆国海兵隊

Travisも、国内の訓練とヴェトナムの戦場において大きな誇りを感じながら務め、上官から容赦なく浴びせられる命令に対して、いかなる場合にも直ちに従うことが身に沁みついてははずである。しかし、除隊となれば命令を与える上官はいなくなり、向かうべき目標を示されることもなくなってしまふ。帰国後の生活が一変した彼が、新たな状況に適合できず不眠と頭痛を抱えてしまうことは想像に難くない。長時間のタクシー乗務が睡眠をもたらすことを期待したものの効きめは現れない。墮落した規律の無い都会に救いを求めようとしても、「女神」のように思えた女性には見向きもしてもらえなくなる。大統領候補者Palantineに「ゴミだらけの下水溝みたいなこの街をきれいにしてほしい」と訴えても、「容易でない」と軽くあしらわれてしまふ。タクシー仲間から「賢者」(Wizard)のニックネームで呼ばれる先輩運転手に日々の虚しさを相談しても、「今の仕事をとにかく続けるんだ。それしか無い。そのうち慣れるから。あまり悩むな。所詮俺達は負け犬さ」という消極的なアドバイスしか得られない。

Travisには、海兵隊時代と同様に体力と気力を注ぎ込む高邁な目標が必要なのである。彼自身がタクシーを走らせながら「日々が過ぎてゆく。行き着く先が無い。俺には目的

地が必要だ」と呟く通りである。「そのうちに本当の雨が降って、汚い奴らを流し去ってくれるだろうか」と願っていた彼だったが、望むような都会の浄化は訪れそうにない。すでに紹介した1967年に出されたThe Doorsの“The End”の一節「子供達はみんな狂ってしまった／夏の雨を待っているうちに」（“All the children are insane / Waiting for the summer rain”）に通じる状況であり、Travisも不眠と孤独と不健全な都会によって精神のバランスを崩してゆく。

口先だけの政治家Palantine¹⁰の殺害を目標と定めてからは、彼の日課は海兵隊の頃に戻ったような厳しい身体の鍛練となる。毎朝腕立て伏せ50回、懸垂50回、薬と粗食をやめて射撃練習も行うというもので、銃とナイフを即座に取り出して構えられるような装置作りにもいそしむ。アパートの壁には「もうすぐ自分をしっかり立て直すのだ」と書かれたポスターを貼っている。このような生活は、多くの人に『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*）中のGatsbyが若い頃作成した以下の日課を思い起こさせるものであろう。

起床…………… 午前6:00
ダンベル体操と壁の駆け上がり…………… ♪ 6:15-6:30
電気その他の学習…………… ♪ 7:15-8:15
仕事…………… ♪ 8:30-午後4:30
野球その他のスポーツ…………… 午後4:30- ♪ 5:00
弁術、姿勢の訓練…………… ♪ 5:00- ♪ 6:00
創意工夫…………… ♪ 7:00- ♪ 9:00

誓い シャフターズや[判読できない]などの店で時間を浪費しないこと。

禁煙。嗜み煙草もやめること。

隔日入浴すること。

毎週1冊良書または雑誌を読むこと。

毎週[5ドルを線で消し]3ドル貯金すること。

両親に孝行すること。(164)

Travisは1人の女性を理想化するというナイーブな面を持ち、目的のために弛まぬ努力を続けるという点においても、Gatsbyに似ている。このGatsbyの日課については、13の徳を常に自らに課した勤勉なアメリカ人の代表格とされるBenjamin Franklin的であるとよく指摘されてきた。となると、Travisは海兵隊員であると同時に、1970年代ではあっても、アメリカ人の根底に3世紀以上流れてきた禁欲な清教徒的な面を持ち続けている人物とも言えるであろう。

V エンディング

Palantineの暗殺の実行寸前にシークレットサービスに気づかれ、Travisは犯罪者になることを免れる。そのすぐ後、ヒモのSportとその仲間を射殺し、結果として未成年のIrisを売春と麻薬の世界から救い出すことになり、Travisはメディアからヒーロー扱いされ、Irisの両親から感謝の手紙が届く。藤原帰一が「悪意あるひねり」(13)と称する皮肉な展開になるのだが、Travisは自分の怪我が癒えた後、ニューヨークに戻ってタクシー・ドライバーの仕事を再開する。なぜ両親のいる町(具体的な地名は作品中には出てこない)での生活を始めないのか、なぜ他の仕事に就かないのか等の疑問に対する答えは示されないものの、以前の様な破壊的な衝動を秘めた思い詰めた表情を見せることは無くなっていて、他の運転手達と気さくに立ち話をする様子に我々は少しの安堵を覚えることができる。

TravisはBetsyを客として家まで送り届けることになるが、車中の彼は落ち着いた表情で言葉を交わす。かつての熱い恋愛感情も激しい憎しみも消え去ったかのようなのである。そのあとの別れ際は、脚本では以下の通りである。

Travis: さあ、着いた。

(Betsyは財布を探る。)

Travis: いや、いや。これはおごりだ。いいから。

Betsy: ありがとう、トラヴィス。

(Betsyは車から降り、ガラスの下ろされた右前の窓のそばに立つ。)

(Travisは走り出そうとする。)

Betsy: トラヴィス？

Travis: ああ。

Betsy: 多分またそのうちに会えるわよね？

Travis: (かすかな笑みを浮かべて) もちろん。

映画ではこれらのセリフはカットされている。車から降りたBetsyは、Travisの座っている左側の窓すれすれに立ち、「トラヴィス。私ね、あの…幾らかしら？」と言い、しばらく沈黙の後TravisはBetsyの顔を見上げて、わずかに微笑みながら「じゃあ」と言って料金を受け取らずに車を走り出させる。言葉を大幅に削ぎ取ったこの別れ方が、2人の心境を想像させる点においてはるかに上出来であろう。この時Betsyが着ているスーツはやはり白なのだが、街灯の作用もあって赤みがかって見え、この神々しさがくすんだような色には含意が感じられる。家へと歩き出したその姿をTravisはバックミラーで見るのだが、2人の間には越えられない境界が厳然と存在していることを確信したはずであり、それぞれ自分の属する世界へ戻って行くという巧みな仕上がりである。

その後、繁華街を走るTravisのタクシーの車窓からは、道路に面して建ち並ぶ酒場や映画館、ホテルのキラキラした看板が見える。そして最後にカメラは静止した位置から道路を走る多くの車をとらえる。その中には何台かのタクシーも混じっているのだが、もはや観客にはどれがTravisの車なのか判別できない。彼と彼の車は都会の夜に溶けこんでしまったのであり、今やニューヨークが主人公になったかのような印象さえ与える。この映画から30年後に監督Scorseseは「ニューヨークにはあまりにも多くの特徴—俗悪、神秘的、恐怖、動的、疲弊、散文的—があり、この都市を映画で描き出す毎にその存在が押し寄せてくる感がある。ニューヨークは単なる背景でとどまることはないのだ」(Lombardo, 190) と語っている。

おわりに

1976年は、ヴェトナム戦争が敗戦というアメリカにとって恥辱的な終結を迎えた翌年であった。経済的にも精神的にも肉体的にも戦争の傷が癒えるには程遠く、アメリカ社会には希望を持って前向きに力強く進もうとする気運は生まれていなかった。その状況を見事に描き出したのが映画『タクシー・ドライバー』であり、主人公Travis Bickleは、「彷徨と孤独のメタファー」¹¹であるタクシーを運転して大都会ニューヨークの様々な醜悪な面を見、耐えられなくなって破壊的な行動に至る。彼の孤独、絶望、虚無感は当時の多くのアメリカ人の心情そのものであろう。自分の命を危険にさらすという体験を経た後のTravisが見るニューヨークは以前と何の変わりも無い。孤独と隣り合わせの状況も相変わらず続くのであり、映画の前半での彼の眩きが思い出される。

俺は生まれてこのかたずっと1人だ。どこへ行っても孤独がつきまとう。居酒屋に入っても、車に乗っても、喫茶店、映画館、それに歩道を歩いていても。逃れることはできないんだ。俺は神の作った孤独な人間なのだ。

しかし、エンディングにおけるTravisの表情からは、この孤独と何とか折り合いをつけて生きてゆこうとする人間の余裕のような雰囲気さえ感じられ、この映画のかすかな救いとなっている。

注

- 1 *Taxi Driver* (DVD) 「特典メニュー」中の「フォト・ギャラリー」において、DVD製作者 Laurent BouzereauがPaul Schraderから直接聞いたこととして述べている。
- 2 アメリカ映画協会ホームページ <http://www.afi.com/100years/>
- 3 *The Charlie Rose Show*. 1994年10月14日放映。
http://www.industrycentral.net/director_interviews/QT02.HTM (トランスクリプト)
- 4 Paul Schraderの脚本の文章は、*Taxi Driver* (DVD) 「特典メニュー」中の「オリジナル脚

本（英語）」からの引用である。111のセクションに分かれており、これ以降、英文を筆者が日本語訳し、そのあとの括弧内に該当するセクションの番号を示す。セリフの日本語訳においては、野中重雄氏による映画の日本語字幕を参考にした。

- 5 *Taxi Driver* (DVD) 「特典メニュー」中の「メイキング・ドキュメンタリー」。
- 6 *Taxi Driver* (DVD) 「特典メニュー」中の「フォト・ギャラリー」。
- 7 “The Pilgrim; Chapter 33” のコーラス部分は以下の通りである。
He’s a poet / He’s a picker / He’s a prophet / He’s a pusher / He’s a pilgrim and a preacher
and a problem when he’s stoned / He’s a walking contradiction / Partly truth and partly fiction / Taking every wrong direction on his lonely way back home
- 8 Robert Sklarによると、1972年から1976年の映画にはヴェトナム戦争の戦場での様子を描写出したものではなく（322）、この戦争を扱った最初のすぐれた映画は、1978年に公開された『ディア・ハンター』（*The Deer Hunter*）である（337）となっている。
- 9 Marine Corps Hymn Lyrics
<http://www.hymns.me.uk/marine-corps-hymn.htm>
- 10 脚本のPalantineの演説では、人種差別や貧困により人々が分裂させられている現状に終止符を打たなければならないことが述べられているが、映画においては「我々国民はヴェトナムで苦しみ続けている」という文章が加えられている。さらに民主主義の詩人として知られるWalt Whitmanの“The Song of Myself” から“I am the man. I suffered. I was there”も引用されていて、文学作品の政治の場での利用が興味を引く。
- 11 *Taxi Driver* (DVD) 「特典メニュー」中の「メイキング・ドキュメンタリー」におけるSchraderの言葉。

引用文献

- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. London: Penguin Books. 1950.
Fontana, David. *The Secret Language of Dreams*. San Francisco: Chronicle Books. 1994.
Lombardo, Patrizia. *Cities, Words and Images: From Poe to Scorsese*. New York: Palgrave Macmillan. 2003.
Sklar, Robert. *Movie-Made America*. New York: Vintage Books. 1994.

アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1974年。
岩井廣『色と形の深層心理』日本放送出版協会、1986年。
黒川裕一『見ずには死ねない！名映画300選（外国編）』中経出版、2005年。
芝山幹郎『アメリカ映画風雲録』朝日新聞出版、2008年。
野中郁次郎『アメリカ海兵隊：非営利型組織の自己革新』中央公論社、1995年。
藤原帰一『映画のなかのアメリカ』朝日新聞社、2006年。

[映画、テレビ番組、歌]

アメリカ映画協会ホームページ <http://www.aifi.com/100years/>
The Charlie Rose Show. 1994年10月14日放映。
http://www.industrycentral.net/director_interviews/QT02.HTM
Coppola, Francis Ford. 『地獄の黙示録』CICビクター・ビデオ、2000年。
Kristofferson, Kris. “The Pilgrim; Chapter 33” Lyrics.
http://www.lyricsfreak.com/k/kris+kristofferson/the+pilgrimchapter+33_20080513.Html

『タクシー・ドライバー』とその時代

Marine Corps Hymn Lyrics

<http://www.hymns.me.uk/marine-corps-hymn.htm>

Scorsese, Martin. 『タクシー・ドライバー』 ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント、2008年。

Stone, Oliver. 『ドアーズ』 パイオニアLDC、2000年。